東南アジア研究センター
1968年度第3・四半期報告

1968年10月から12月にいたる，1968年度第3・四半期の東南アジア研究センターの活動状況を要約報告する．

現地調査研究としては，前期にひきつづき福井捷朗助手（東南ア研）が，バンコク連絡事務所長代理として勤務するとともに，水稲の植物栄養学的研究をつづけている．

センターにおいて目下立案中のタイ研究計画の予察を行なうため，服部共生助教授（京都府大，土壌学），高谷好一助教授（東南ア研，地質学），瀬戸口烈司助手（東南ア研，古生物学），渡部忠世教授（鳥取大学，農学），秋浜友也技官（農技研，遺伝学）が，11月1日タイ国に赴いた。服部，高谷，瀬戸口班は主としてチュラロンコン大学理学部地質学科を中心として，渡部，秋浜班はタイ国農業省農業局の協力を得て，それぞれ将来計画に必要な予備的調査を行なっている。

養成計画としては，さきに留学生として採用した土屋健治（東大・大学院・教養），山田勇（京大・大学院・農）の両名が，それぞれインドネシア近代史および熱帯林学研究のためインドネシアに赴いた。土屋健治はジョクジャカルタのガジャマダ大学文学部に，山田勇はボゴール植物園に留学する。

交換計画としては，sabbatical leave で来日し，センターに滞在中の，ミシガン大学の魚類学者 John E. Bardach 教授による第2回セミナーを行なった。

出版計画としては，Reports on Research in Southeast Asia, Natural Science Series No. 3, Kiyoshi Takimoto (ed.) *Geology and Mineral Resources in Thailand and Malaya* が刊行された。

図書整備計画としては，前期にひきつづきタイ国近代史研究に不可欠の史料である，チュラロンコン王時代のシャム王国官報（1874～1908）のゼロックス化作業を完了し，1900年までの分が利用可能の状態となったことを報告したい。

激動する大学紛争のさ中にあって，東南アジア研究センターは，大きな試練にさらされている。真に学問的な業績を積み重ねることによって，この苦難の時期を乗り越えることは，われわれに課された大きな責任である。今後共，いっそうのご援助，ご鞭韃をお願いする次第である。

1968年12月

京都大学東南アジア研究センター所長
相　良　惟　一